尋常小學讀本唱歌 下

東京 啓文館發兌

K120.73
34
2

K120.73
34
2

尋常小學讀本唱歌下卷

目次

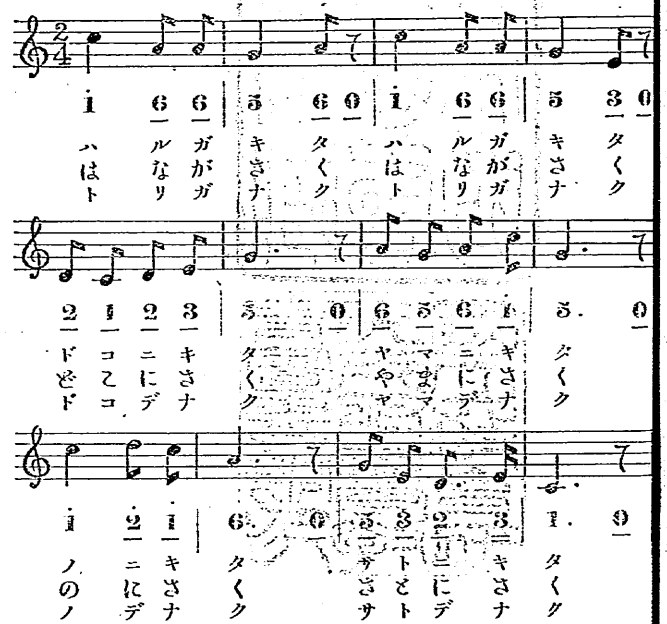
一のゐそび……一
一たうろ……二
一夕立……四
一元寇……六
一としのくれ……八
一北白川宮……十
一春の遊……十二
一日本の國……十四
一停車場……十六
一燈臺……十八
一新聞紙……二十
一軍人……二十二
一わが帝國……二十四

以上

明治 37 5 18 内交

開き不良

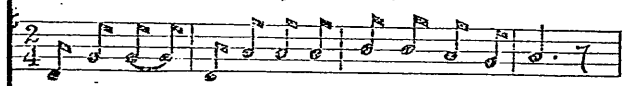
のあそび



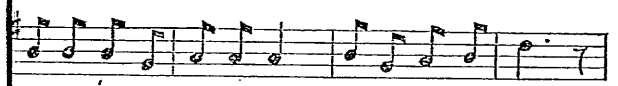
春がきた。春がきた。
どこに、きた。
山に、來た。
野に、來た。
さとに、來た。」
花がさく。花がさく。
どこに、さく。
山に、さく。
野に、さく。
さとに、さく。」
鳥がなく。鳥がなく。
どこで、なく。
山で、なく。
野で、なく。
さとで、なく。」

開き不良

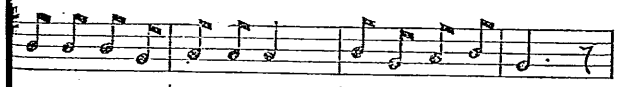
たうゑ



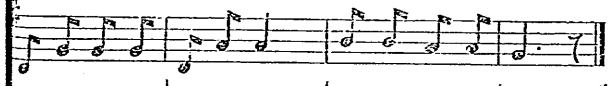
5̇ 1 1 1 | 5̇ 2 2 2 | 3 3 2 1 | 2. 0 |
イ マ ハ ー イ ソ ガ シ タ ウ エ ド キ
これから たびたび たぐさとり



3 3 3 1 | 2 2 2 | 3 1 2 3 | 5. 0 |
コ コ デ ハ ウ マ ニ タ ヲ ス カ セ
しだいに てかずが ふえてい く



3 3 3 1 | 2 2 2 | 3 1 2 3 | 1. 0 |
ソ コ デ ハ ナ ヘ ヲ タ ニ ウ エ ル
どうぞー あきまで つでーよく



5̇ 1 1 1 | 5̇ 2 2 | 3 3 2 2 | 1. 0 ||
ス カ セ ル ウ エ ル イ ソ ガ シ ヤ
てんきも つづけ あめも ふれ

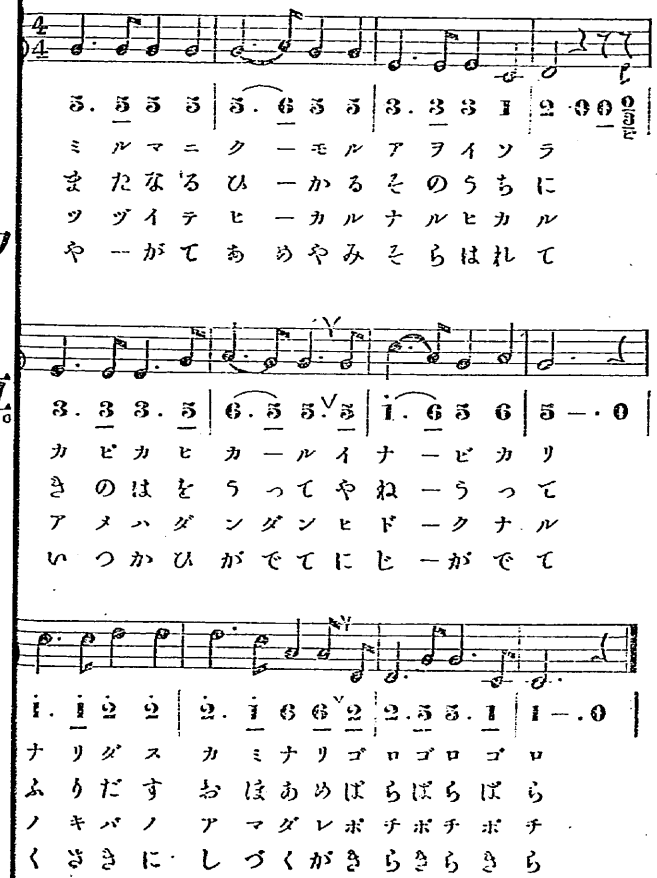
たうゑ。

いまは、いそがし、
ここでは、馬に、
そこでは、苗を、
すかせる。うゑる。
これから、たびたび、
しだいに、てかずが
どうぞ、あきまで、
天氣もつづけ。

たうゑごき。
田をすかせ、
田に、うゑる。
いそがしや。」
田草 とり。
ふえ ていく。
つでーよく、
雨も ふれ。」

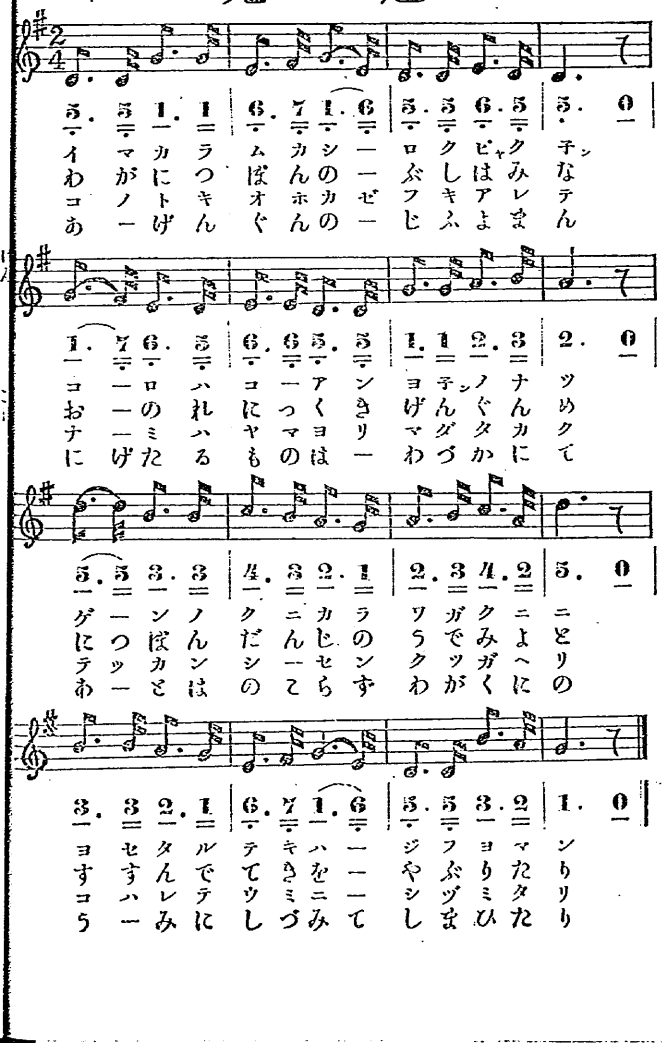
開き不良

夕立



見るまに、くもる　青い空。
ひかひか、ひかる　いなびかり。
なりだすかみなり、　ごろ　ごろ　ごろ。」
また、なる、ひかる、　そのうちに、
木のはをうって、　屋根うって、
ふりだす　おほ　あめ、
ばら　ばら　ばら。」
つづいて、光る。　なる。光る。
雨は、だんだん、　ひどく　なる。
のきばの　あまだれ、
ぽち　ぽち　ぽち。」
やがて、雨やみ、　空はれて、
いつか、日が出て、　にじが出て、
草木に、しづくが、
きら　きら　きら。」

元寇



元寇。

今からむかし、六百年、ころは弘安四年の夏、元の國から、わが國に、よせたるてきは十餘萬。

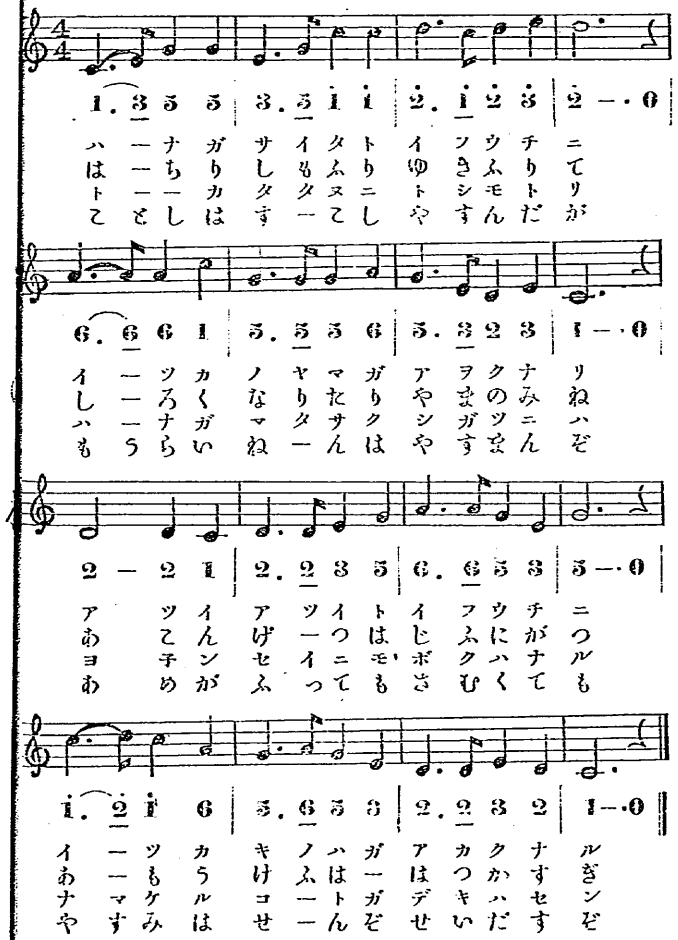
わが日本の武士は、みな、「おのれ、にっくき、元軍め。日本男子のうで見よ。」と、すすんで、てきをやぶりたり。

このとき、大風ふきあれて、なみは、山より、また、高く、てっかん、四千、くつがへり、こはれて、海にしづみたり。」

あー。元軍の十餘萬、にげたるものは、わづかにて、あとは、のこらず、わが國の海にしづみてしまひたり。」

開き不良

としのくれ

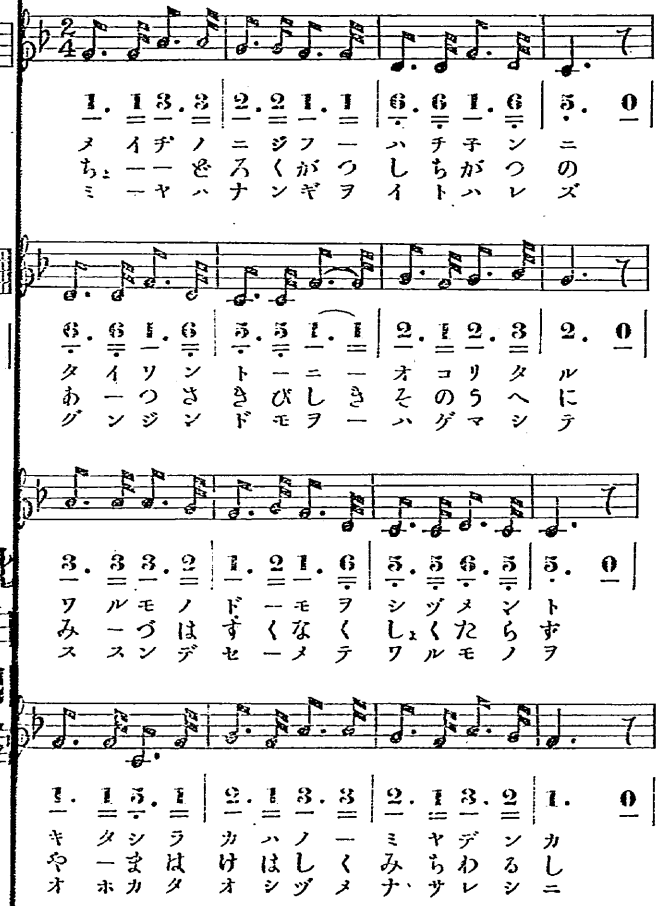


「花がさいた。」と
いつか、野山が
「あつい。あつい。」と
いつか、木のはが
はちり、しもふり、
白くなりたり、
あー。今月は
あー。もう、けふは
十日たたぬに、
花が、また、さく
四年生にも、
なまけることが、
ことしは、すこし、
もう、來年は、
雨がふっても、
休みはせんぞ。

いふうちに、
青くなり、
いふうちに、
あかくなる。」
雪ふりて、
山のみね。
十二月。
二十日すぎ。」
としもくれ、
四月には、
ぼくは、なる。
できはせん。」
休んだが、
休まんぞ。
さむくても、
せい出すぞ。」

開き不良

北白川宮



5. 5 5. 5 | 6. 6 5. 3 | 5. 3 2. 1 | 2. 0
オ ホ ク サ ノ に ン グ ン ジ よ キ ニ ヒ ぐ キ ん カ ツ ヒ ラ レ ル レ テ モ テ
い く さ オ ツ ビ ウ ー キ カ カ ラ レ
フ ト オ
3. 3 2. 1 | 6. 5 1. 1 | 2. 1 2. 3 | 1. 0
イ サ ン デ ん ヤ オ ぎ イ に カ デ は ク ー ー レ ナ よ ナ サ わ サ レ り レ タ た タ リ り リ
こ の な シ オ オ
ヲ

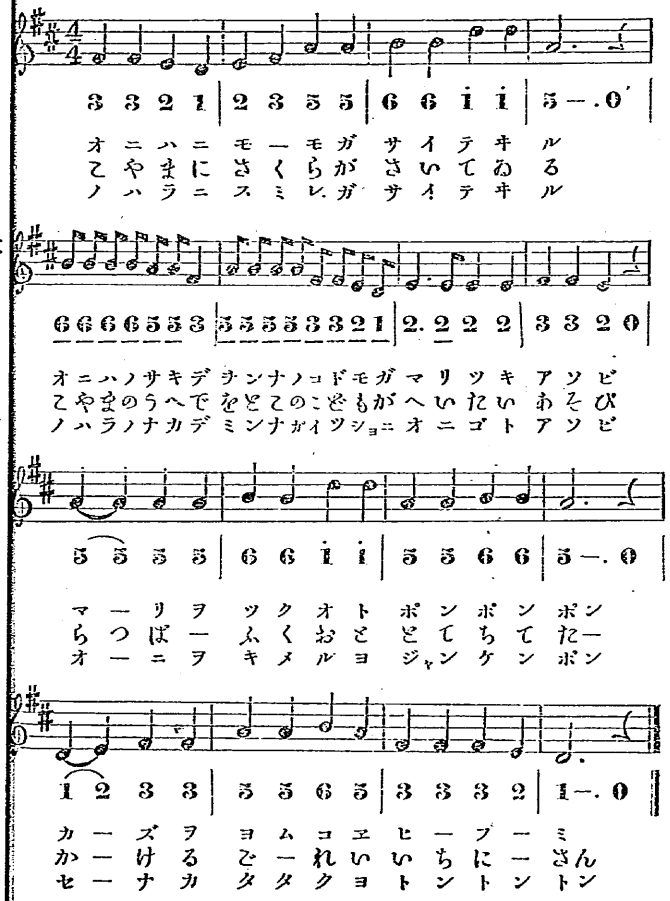
明治の二十八年に、臺灣島におこりたるわるものどもを、しづめんと、北白川宮殿下、多くの軍人ひきつれて、勇んで、おいでなされたり。」

ちょーど、六月、七月の暑さきびしき、そのうへに、水はすくなく、食たらず、山はけはしく、道わるし。いくさにつよき軍人も、このなんぎには、よわりたり。」

宮は、なんぎをいとはれず、軍人どもをはげまして、すすんで、せめて、わるものを、おはかた、おしづめなされしに、ふと、御病氣にかかられて、をしや、御病氣にかくれなされたり。」

開き不良

春の遊

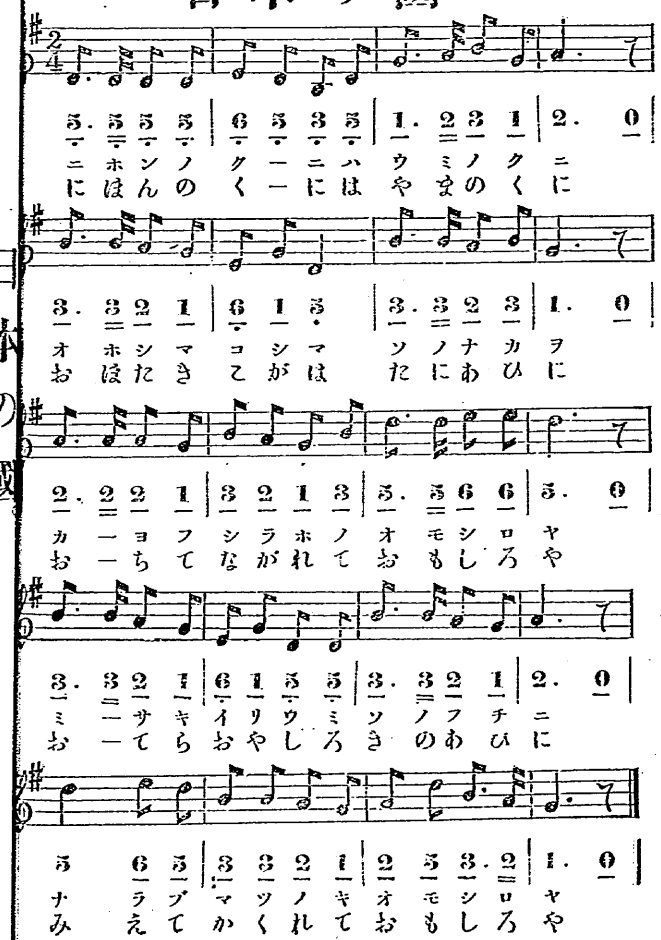


春の遊

お庭に、桃がさいてゐる。
お庭のさきで、
女の子どもがまりつきあそび。
まりをつく音、ぽん、ぽん、ぽん。
かずをよむこゑ、ひー、ふー、みー。」
小山に櫻がさいてゐる。
小山の上で、
男の子どもがへいたいあそび。
らつぱふく音、とて、ちて、たー。
かけるぞーれい、一、二、三。」
野原に、すみれがさいてゐる。
野原の中で、
みんなが、いつしよに、おにごあそび。
おにをきめるよ。「じやん、けん、ぽん。」
せなかたたくよ。とん、とん、とん。」

開き不良

日本の國



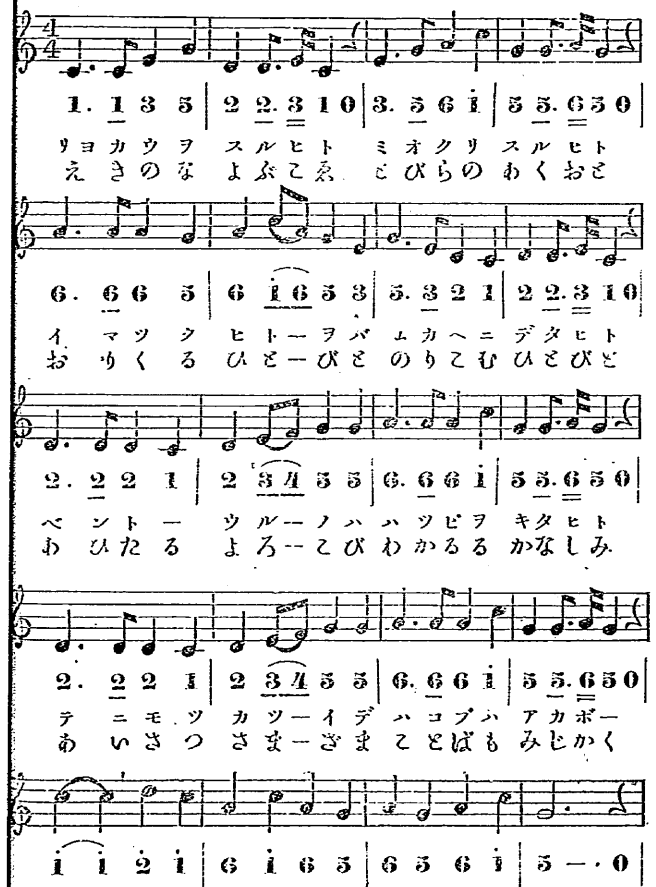
日本の國

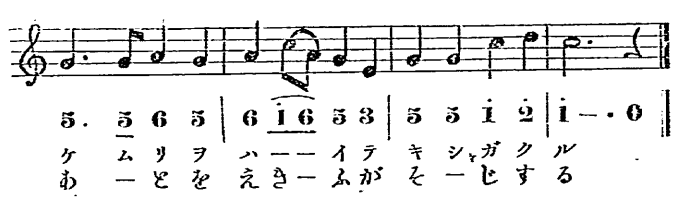
日本の國は海の國。
大島、小島、その中を
通ふ白帆のおもしろや。
岬、入海、そのふちに、
ならぶ松の木おもしろや。」

日本の國は山の國。
大瀧、小川、谷あひに、
おちて、流れて、おもしろや。
お寺、お社、木のあひに
見えて、かくれて、おもしろや。」

開き不良

停車場





停車場。

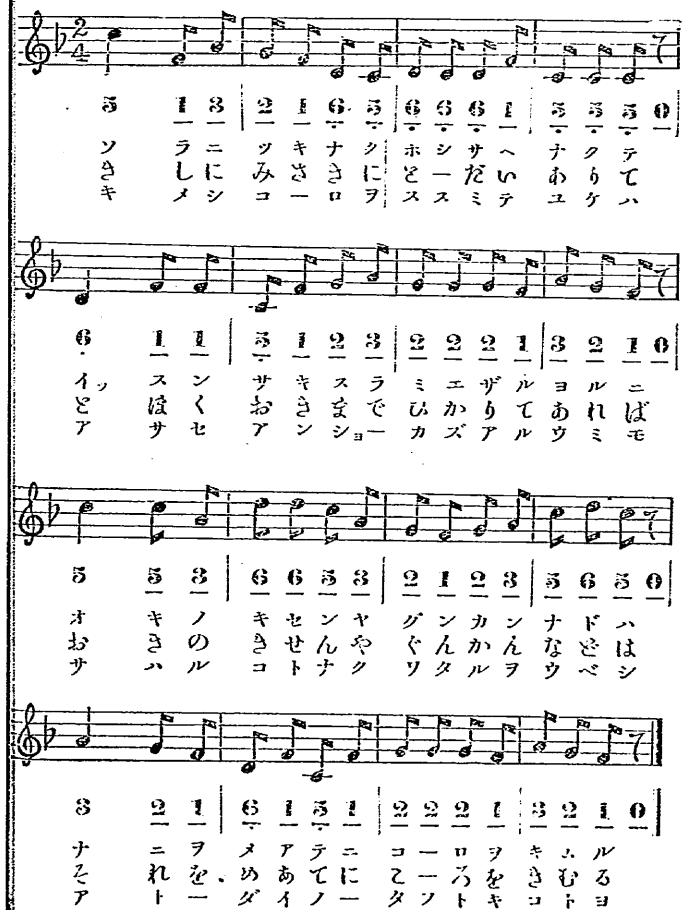
旅行をする人。　　みおくりする人。
今着く人をば　　むかへに、出た人。
べんとー賣るのは　　はっぴを着た人。
手荷物かついで、　　運ぶは赤帽。
がらんがらんと、べるがなる。
煙をはいて、汽車が來る。」
驛の名呼ぶ聲。　　とびらのあく音。
おりくる人人。　　乘りこむ人人。
あひたる喜。　　わかるるかなしみ。
あいさつさまざま、　　ことばも短く。
やがて、汽車さり、人ちりて、
あとを、驛夫が、掃除する。」

燈臺。

空に、月なく、
一寸さきすら
沖の汽船や
なにをめあてに、
岸に、岬に、
遠く、沖まで、
沖の汽船や、
それをめあてに、
きめし航路を
淺瀨、暗礁、
さはることなく、
あー。燈臺の

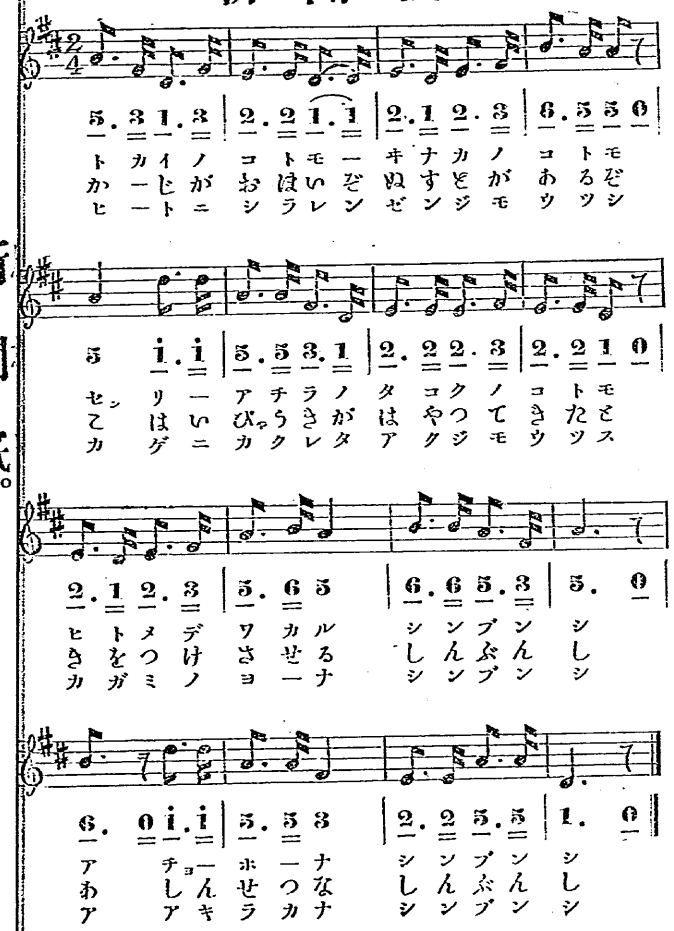
星さへなくて、
見えざる夜に、
軍艦 などは、
航路をきむる。
燈臺ありて、
光りてあれば、
軍艦などは、
航路をきむる。」
進みて行けば、
數ある海も、
渡るをうべし。
貴きことよ。」

燈臺



開き不良

新聞紙

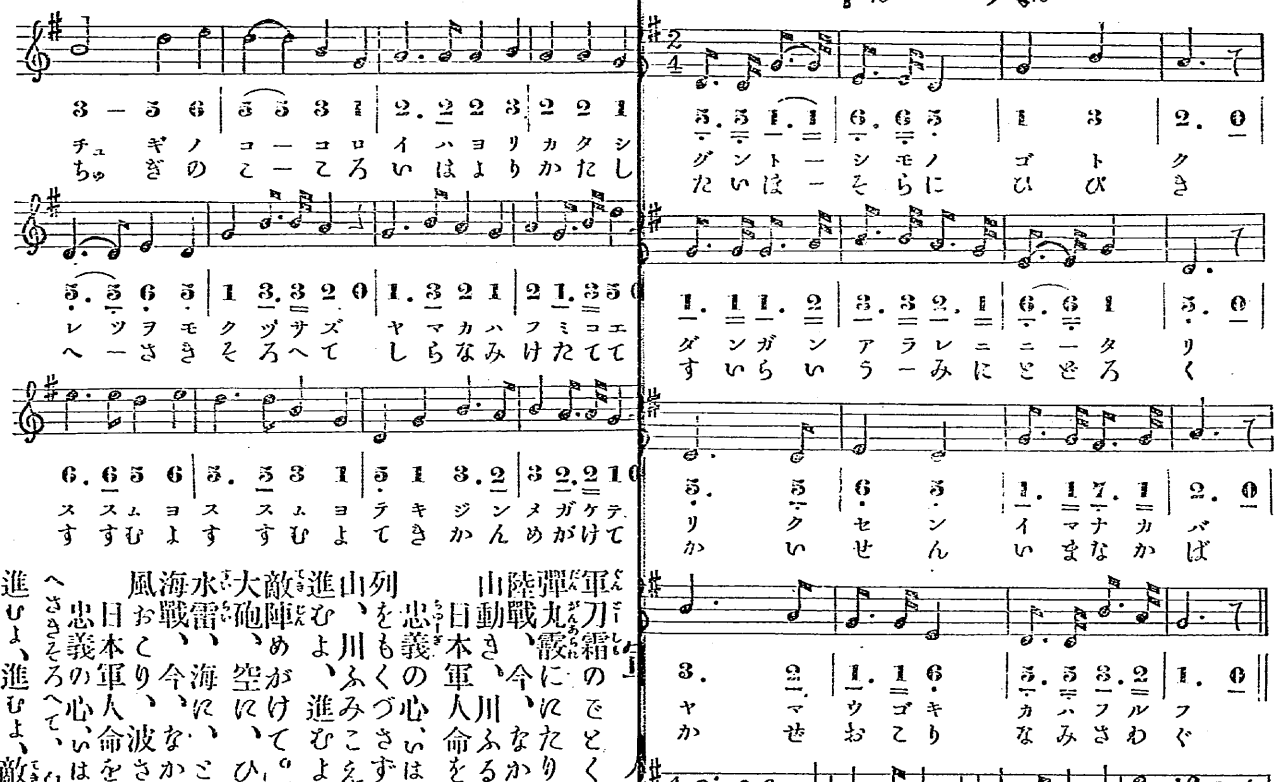


新聞紙。

都會の事も、　田舍の事も、
千里あちらの　他國の事も、
一目で、わかる　新聞紙。
あー。ちょーほーな　新聞紙。」
「火事が多いぞ。　ぬすとがあるぞ。
こはい病氣が　はやって來た。」と、
氣をつけさせる　新聞紙。
あー。しんせつな　新聞紙。」
人に知られん　善事もうつし、
かげにかくれた　惡事もうつす。
鏡のよーな　新聞紙。
あー。明かな　新聞紙。」

開き不良

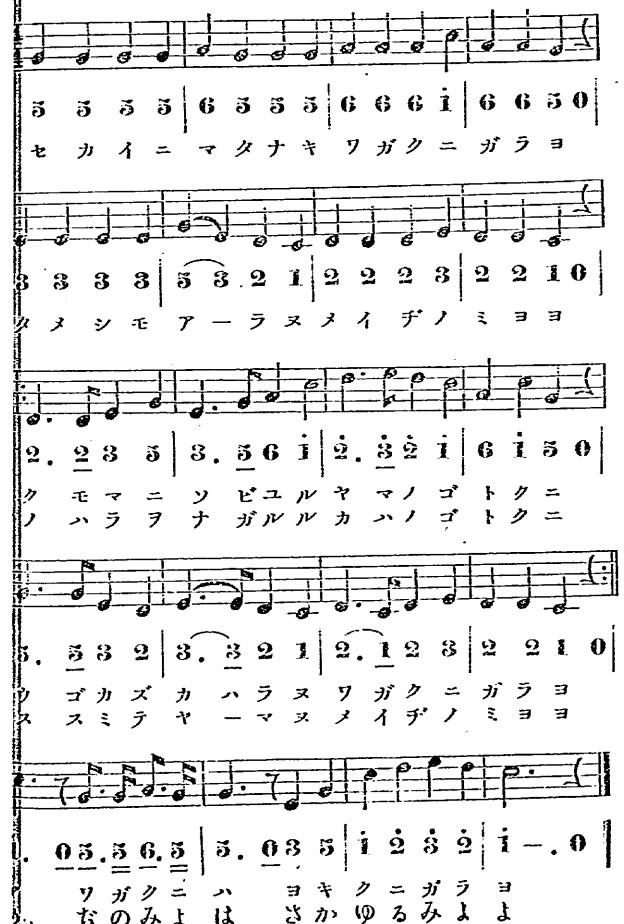
軍人



軍人刀霜のごとく、
陸戰弾丸霰にたり、
今、なかば。
山動き、川ふるふ。
日本軍人命ををしまず。
忠義の心いはより、かたし。
列をもくづさず、
山、川ふみこえ、
進むよ、進むよ、
敵陣めがけて。
大砲、空に、ひびき、
水雷、海に、こだろく。
風海戰、今、なかば、
おこり、波さわぐ。
日本軍人命ををしまず。
忠義の心いはより、かたし。
へさきそろへて、白波けたてて、
進むよ、進むよ、敵艦めがけて、

開き不良

わが帝國



わが帝國。

世界に、ならぶなき、
ためしもあらぬ、
雲間に、そびゆる
動かず、かはらぬ、
野原を流るる
進みて、やまぬ
あー。わが國は
明治の御代は

わが國柄よ。
明治の御代よ。
山のでこくに、
わが國柄よ。
川のでこくに、
明治の御代よ。
よき國柄よ。
さかゆる御代よ。

明治三十七年五月十二日印刷
明治三十七年五月十八日發行

常小學讀本唱歌下卷
定價金六錢

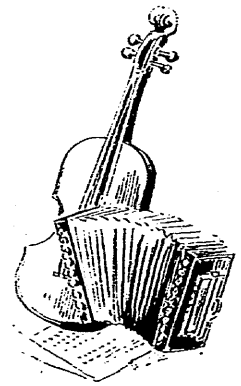
校閲者　山田源一郎
著者　中田書店編輯所
發行者兼印刷者　東京市日本橋區通二丁目三番地　中田富
印刷所　東京市神田區猿樂町弐丁目弐番地　博信堂
東京市日本橋區通二丁目三番地
中田支店内
發行所　啓文館

不許複製

大賣捌所

東京　北隆館
大阪　吉岡
長岡　黒川
名古屋　福井
福井　瀧澤
長野　村
廣島　中西
積善館

東京　博多
大阪　德島
京都　高岡
金澤　黒崎
東京　大田
千葉　林
京都　五宇
福井　中平
熊本　宇都宮
鹿兒島　海堂
久留米　車次郎
大多田
杉本
晶屋
長崎
吉川
菊竹



6